

草場茂憲氏に聞く（鳳管弦楽団の思い出）

※昭和三五年法学部法律学科卒

佐賀県に生まれる

私は佐賀県の出身で、長崎本線に肥前竜王駅という、特急も急行も停まらない普通の駅があります。駅の前に長崎の方まで向かっている国道が一本走っているんですけど、駅から一キロほど離れたところで家は自転車をやってたんです。親父は八幡製鉄で働いていたんですが、脱サラしたのかな、体が悪かったのかな、自転車を始めて、場所も昔は須古にあったのかな。私も詳しくは知らないけど、その辺で自転車を細々とやって、その後国道沿いの今の廻里津に移転したようです。私は移転する前の昭和一二年に生まれました。

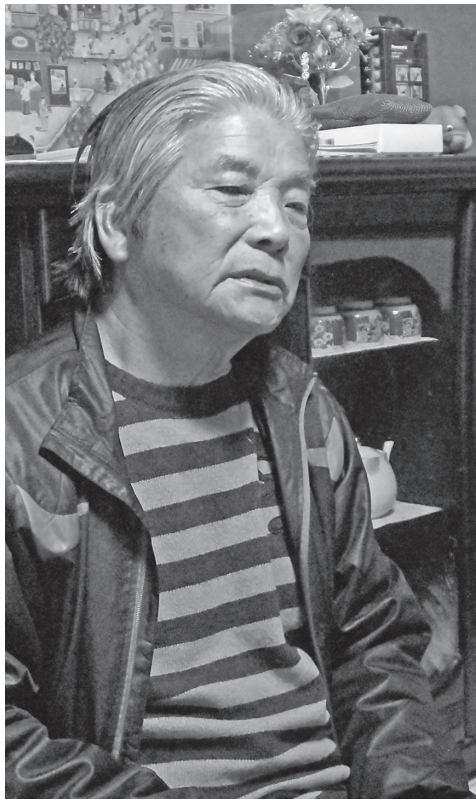
兄妹は、私の二歳上に男の子がいましたが、小さい時に亡くなりました。その上に姉がいます。まだ元気です。その上にも姉はいましたが二〇歳くらいで亡くなった。さらにその上にも姉がいて、小さい時に亡くなったらしいです。そして六九歳で他界した長男がいました。

長男は、私と一〇歳違いますが、よく遊びに連れていってもらいました。あの辺は山が近くてね。山に湖があってそこに夏は泳ぎに連れてってもらったね。小学校に行ってた頃なのか記憶にないけれど、泳げないのに、面白半分に放り出されちゃってね。それで溺れ

て死にそうになったこともあります。死に損なっちゃった。

私は末っ子で、上から男・女・女・女・男の六人兄妹になりました。末っ子なものですから、親にはよく可愛がってもらいました。外へ行けば飴玉なんか買ってきてくれてね。甘いのが大好きで、よくそれを食べたおかげで小さい時から虫歯が多かった。今じゃあ歯は入歯だらけですよ。そのくらい可愛がってもらったんですね。

私はおふくろの三三歳の時の子どもなんです。三三って女性の厄年らしいですよ。厄年のせいかな、今で言う子宮筋腫かなんかで、私を産んだあとに子宮を摘出してらんです。ですから私の後には子どもがいない。そういうことで、三三歳で生んだ子どもは宝の子だってね。そんな話をされて育ちましたよ。



音楽を始めたきっかけ

小学校は地元の錦江小学校という学校に行きました。薬局の子どもが同級生にいました。昔は薬局っていったらお金持ちが多くて、名前は溝上というんですが、そいつが中学は佐賀市の附属中学に行くって言い出してね。仲が良かったもんだから、溝上君が行くなら俺も行きたいって思ったんですけど、行けないんですよ。住所を変えなきゃいけないから。それで、その当時、佐賀市に龍谷中学・高校という私立の東本願寺系の学校があつたんです。それで、そこに中学から行きました。そこでオーケストラを始めましたよ。

汽車で一時間くらいかけて通学しました。六年間の皆勤賞ももらった時の賞状が残っています。当時、龍谷は中学が結構有名だったので、地元の人でもみんな一時間くらいかけて来てたんじゃないかな。中学の四つ上の先輩には栗林義信っていうオペラ歌手がいます。

中学・高校六年間、私は音楽部にいました。楽器は管楽器のチューバ。弦楽器ではチェロ等。音楽部に入ったきっかけは、昔から音楽が好きだったからです。小学校時代には独唱してたくらい、歌も好きでね。しかも楽器にも興味があつたもんだから。

友だちの中には楽器屋の息子とか色んなのがいましたけど、音楽部は人数は結構いましたよ。総勢一〇〇名まではいませんけどね。なかには、その当時から結構上手い人がいましたよ。トランペットとかね、ピアノが上手い人とかね、本当に色んな人がいました。

専修の管弦楽の話に繋がる話を今からしますが、その音楽部に田中（優行）先生という先生がいたんです。田中先生は台湾の音楽学校を出てたのかな。非常にうるさくて面白い先生でした。なんでその先生が龍谷にいたかと言うと、先生の父親は台湾の鉄道会社に入っていますが、戦争で郷里の佐賀に疎開してきたんです。だから先生もお父さんと一緒に疎開してきた。それで自分は故郷で音楽の先生をしていたんです。その当時どういうわけか、お母さんは東京の駒込にいたんですよ。

田中先生には非常に可愛がってもらいました。私が高校生の頃、あの人は独身で下宿していました。私たちより一回り以上も違いましたが、その下宿しているところに何回も泊まりに行ったり、よく食事にも連れていってくれた。佐賀のトンコツラーメンをよく食べました。

専修大学へ入学

高校三年になると、進学を考えなきゃいけないじゃないですか。その当時は全国でオーケストラをやっているようなところはほとんどなかった。管弦楽団は珍しいんですよ。ブラスバンドつまり吹奏楽はそうでもないですけど。今でも吹奏楽をやらない高校はないでしょう。でもオーケストラは意外と少ない。

僕は日大の芸術学部に行きたかったんですよ。音楽が好きだったからね。それで田中先生に日大に行きたいって言ったら、その当

時、音楽をやるような人は芸人と呼ばれてたんだけど、「芸人で飯は食えないよ」と言われた。「普通の大学を出て、普通の仕事をしていたほうがいい」なんて言われてね。そして田中先生は、「草場君、龍谷を卒業して専修大学で教務課長をしている中野福一さんを頼って、東京へ行つて、学生寮に入つて、管弦楽団をやつてはどうか」と言うんです。その当時、学生寮には藤野先生という人がいたんです。その人が学生寮の傍に住んでいて、学生寮の管理みたいなことをやってたんですね。それで田中先生は「草場君、私はあなたたちが大学に入つて、暫くしたら高校を辞めて上京する」と言う。そんなこんなで龍谷からは、私の他に私の友だちの山田、木村、古賀なんか専修大学に進学して学生寮に入つた。

推薦じゃなくて、一応入学試験は受けました。ただ受験はするんだけど、落ちたりしないような試験だった(笑)。何て言うのかな、そういうことやつてたんだよね昔は。神保町まで行つて、他の受験生と同じ教室に入つて、だから不正はしてないですよ。なにしろ、教務課長の中野福一さんがいたからね。見かけはちゃんと試験をした。その当時は野球選手なんかは無試験みたいなかたちでやつたでしょ。同じ扱いだと思えますよ。

大学受験は、専修以外は受けなかった。両親も田中先生の言葉を信じてました。その頃はよっぽどお金持ちじゃないと大学へ行く人は少なかつた。ましてや私立です。国立だったらまだ行く人も多かつたけど、あの田舎から東京の私立大学へ行く人なんてほとんど

いませんよ。

友だちの山田はその頃、佐賀で八百屋をやつてたから多少金回りが良かったのかな。木村も古賀も同じで金回りが良かったんでしょ。寮に入れると言つたつて学費はかかるわけだから。免除なんてないですよ。普通に払いました。

どうして私が私立大学に行けたかというところ、その当時の自転車屋は今の自動車のディーラーみたいなもんでね(笑)。昔はね、自転車が今の自動車みたいで自転車に乗ってる人は少なかつた。佐賀じゃ。一台売れば結構な稼ぎになつたつていう時代でした。それと祖父が四キロほど離れたところで田んぼを持っていて百姓をしてた。親父は長男なんです。たまたま店の裏の土地が空いてたんですよ。それで爺様も年を取つたので長男のところに来るかとなつて。田んぼを売つて隣に来て、家を建てたんです。その時、私は中学生だったかな。建てた家の二階には特別に私の部屋を作つてくれてね。要するに金を持つていたんです。爺様も婆様もね。本当に良く小遣いをもらいました。おそらく、その援助があつたおかげで大学に入れたんですよ。商売だけじゃ大変です。日銭は入りますが、余分なお金はあまりない。やはり爺さんのおかげかなと思います。だからその当時はよく兄貴に「俺だけ苦労して」つて言われてましたよ。ちなみに学部は自分で選んで、法学部法律学科に入学しました。僕は法律も好きだったんですよ。今でも国会討論会を観るのが大好きなんです。他の友だちは商経学部に入學した人もいます。その当時

は法学と経済・商学の三つしかなかった。大学院はその当時からありましたね。学部はみんな自分で選んで入ったんです。入るのは非常に簡単だった。よくわからないけど、何かの方法があったんでしょう。

学生寮に入ってからのことには話を戻すと、入ったのは昭和三二年です。学生寮の寮生を中心に管弦楽団を結成することを前提にして、田中先生も私も一緒に上京してきた。だから友だちも私が引って張ってきたようなかたちで入学して、私と山田と古賀は学生寮に入りました。私と山田は同室でした。木村は親父の関係でどこかに下宿していました。

学生寮での生活

学生寮は三人部屋でした。私の部屋は、山田と私、そして大阪から来た人の三人でした。どの部屋も同じで広さは六畳くらいあったのかな。食堂もありました。当時、学生寮には何人位いたのか、ちよつと記憶が定かじゃらない。建物は二つか三つあったような気がする。建物と建物の間の敷地で火をおこしてラブレターを燃やした覚えがあるから。

寮長は、学生の中から決めてやってたと思う。先生は寮の中にはいなかったけど、藤野先生が寮監みたいな感じで、ちよつと離れたところ、今の生田校舎のちよつと横に民家があって、そこにいたような記憶があります。その当時は食糧難でした。お菓子とかもあま

りないような時代だった。寮に消火用のバケツがあるんですよ。朝か夜か忘れたけど、暗い時間に学生寮の近くの畑に、そのバケツを持って芋掘りするんです。芋泥棒ですよ。それを持って帰ってきて、寮で隠れて洗って、輪切りにする。そして秋葉原から買ってきた電気コンロで焼いて食べた。ところがヒューズが飛んじゃって。本当は寮の決まりでそんなことはしちゃいけないんです。それで困っちゃって、そんなことしているのがばれたら怒られちゃうじゃない。幸い食堂で働いてた人に見つかっちゃったけど、大袈裟にならずに助かりましたよ。

寮の食事覚えてるのは、今も牛舌なんてあるでしょ。おかずにペロがそのまま丸ごと出てきた。焼いてたのか煮ていたのか忘れたけど、ペロがペロツと（笑）。そういう食事を食べてたな。美味しかったかどうかなんて覚えていない。食べないとしょうがないからね。あと印象に残っているのはお風呂。なんか不潔だね。風呂も毎晩じゃないんだ。私たちは田舎つぺでしょ。顔も都会の人と全然違うわけ。黒いしね。私もよく電車に乗ると思っていた。田舎とまったく違って都会の人は顔もみんな白い。それで風呂に入ると、石鹸で一生懸命タオルで顔をこすった。そしたらお風呂がきれいじゃなかったからか顔中にバイキンが入っちゃって、顔一面が腫れちゃったのを覚えてるよ。

あと、よく学生寮の仲間たちと向ヶ丘遊園駅に行く下り坂の途中に柿がいっぱいになってる畑があってね。それで垣根にちよつと穴が

空いてるようなところから入って柿泥棒をした。よくやってたよ。一人を番人にして「ちよつと見とけ」なんて言いながらね。まだみんな二〇歳前だもんね。よく遊びました。

管弦楽団を結成

入学して、すぐに管弦楽団を創ろうにも、音楽経験者はやはり龍谷から来た人ばかりだね。それで団員の募集を早速始めたんです。生田にも講堂みたいのがあって、そこで、よく新入学生の勧誘をやっていました。それで私が壇上が上がってやったんです。まったくの素人ですけどそれで何人か応募がありました。二年間は団員の募集を続けました。おかげで何十人か集まりましたよ。

管弦楽団は、一年生の時に先生と私の二人で立ち上げました。田中先生は暫くは無報酬のボランティアで管弦楽団の指導をやっていました。どれだけの期間をボランティアでやったかは記憶にないんだけど、今で言うパートみたいな扱いじゃないのかな。まだ認めてもらえないから最初は非常勤までもいかないんですよ。どんなかたちで金をもらっていたのかな。学生寮で経費で払っていたのか、大学で払っていたのか、そこまではわかりません。「草場君、やってるけど全然まだ金をもらってないよ」ってブツブツ言っていましたから。田中先生はね、おそらく最後まで先生扱いはされてなかったんじゃないかな。私もよくその辺はわかりません。

とにかく何十人か団員が集まったので、初めての演奏会を昭和三

一年、私が一年生の時に開催しました。場所は、向ヶ丘遊園駅にあった登戸公民館というところですよ。それが第一回目の演奏会ですよ。単独の演奏会だったか、学生が一〇月くらいにやる文化祭の一環かは覚えていないけど写真が残っています。

最初の頃は、経験者は龍谷の卒業生だけで、残りはみんな素人でした。しかし、団員の中に北海道の斜里出身の布団屋の息子で坂井という男がいましたね。そいつはアコーディオンが上手くて、とにかく才能があった。一つ下の後輩でしたが、私が二年生になってからも経験者は少なく、教則本片手に我々が指導しました。

あと、私たちが創った楽団は、専修大学で一番最初に出来た管弦楽団だったので、当然楽器がない。揃えなきゃいけないでしょ。上野に島田楽器店という卸屋があった。そこを田中先生が知ってたんだね。誰かの紹介だろうけど。そこから買ってたんですよ。最初は学生寮の費用で購入してたと思います。その後、大学の費用に切り替わったと思いますけどね。それで大学が購入したことになって、大学の備品になったはずですよ。全部その島田楽器店から買って、他は下倉楽器店からも買ったりました。

卒業後の学生生活

学生寮には二年いました。その後は田中先生と一緒に暮らししました。向ヶ丘遊園の駅前の小さな家ですよ。その家で田中先生はピアノも教えていました。田中先生はずっと独身で、家には私と先生と

姪っ子と、あと駒込から引越して来たお母さんも一緒でした。

私はそこで一回死にそうになったんです。すごく寒い日だったので、練炭火鉢の消し忘れで、窓に毛布の古いやつを張ったんです。

そのまま寝ちゃったんですよ。それで一酸化炭素中毒になった。夜中に目を覚ましたけど、頭がガンガンするし、先生は意識が朦朧としてた。もっと時間が経ってたら二人とも死んでいたね。お母さんたちは別の部屋にいたのでしっかりしていて、気付けには醬油を飲ませればいって言って、先生に飲ませてね。それで意識を回復して助かったんだよ。

何部屋あったか忘れたけど、六畳の部屋にグラランドピアノを置いてレッスンしてたのかな。同じ部屋でそのちよつと空いてたところに三段ベッドを作って、家賃がほしかったのか、私と木村と山田を下宿させて、私たち三人は三段ベッドに住ませてもらった。

暫く先生と私たち三人は一緒に生活していたけど、その後、私だけ先生と一緒に喜多見に移った。実は喜多見に移る前の短い期間だけど、木村・山田と三人で成城学園で部屋を探した。下宿先は映画俳優の小島洋々という人の家で、息子は子役、娘は日劇のダンシンダチームに入っていた。そういう家族でしたね。そういう人の家に少しだけ下宿しました。

寮を出たのは、嫌になったとかそういう意味じゃなく、先生が駅前に家を建てたことを契機に、じゃあ寮を出て一緒に住みましょうってことになったからで、先生も多少、家賃がほしかったんじゃないかな。

当時の私の仕送り金額は一万円位でした。アルバイトもしてました。神田に通っていた頃かな。会報の読み合わせに行ったことがある。先生のお弟子さんの誰かの紹介だったような気がする。

その頃のアルバイトが一番お金になったのは死体洗い。学生で死体洗いのアルバイトによく行ってたのがいた。

だけど、僕はあんまりアルバイトはしなかった。音楽、音楽でそんなに時間がなかったから。勉強も本当に授業をサボってた。だから僕と山田は卒業する時、単位が足りなくて追試験を受けた。それも昼間はもう授業がないもんだから夜間に通ったよ。夜間に通わないと単位が取れないんだもん。授業の思い出は、出来るだけ受ける気持ちはあったが、始めから終わりまで楽団のことばかりで、四年間の勉強は試験前のつめ込みが多かった。

就職活動とその後について

僕は卒業の時に、結構いろいろと頑張ったもんだから、教授から、名前は忘れましたけど話がありました。専修大学松戸高校が出来て間もない頃で、当時、川島正次郎が副総裁で、その人が創った学校なんだけど、その事務員はどうだって話が来た。良い話じゃないですか、まだ出来たばかりだし。その教授に、田中先生が頼んだのかどうかはわからないけど、田中先生からも「草場君、そこに行つて事務員になって管弦楽団の立ち上げを手伝ってくれよ」と

言われた。そういう条件が入っていたから、そこに推薦されたんだと思います。

なんで断ったのかと言うと、その当時付き合っていた人に反対されたこともあり、その当時は、松戸といったものすごく遠い場所のように感じていた。今だったらそうでもないけど、それで反対された。そんな遠いところに行くのは嫌だって。四年前の立ち上げの苦勞をこれ以上続けたくなかった。だからしょうがなくその話を断った。

自分で放棄したので就職活動も最初からやり直しになった。それで大学の就職係に行ったら、第一生命を紹介されたんです。第一生命っていうと聞こえが良いでしょ。だけどあれは事務系と外交系と二つがあつて外交は本社ではやらない。結局、京橋にあつた第一生命の京橋支社に就職を決めたんです。そうしたら給料が高い。その当時、普通の会社の初任給が一万二、三千円位だったかな。でも第一生命は初任給で二万ちよつとある。これは良いなと思つたけど、それだけ仕事が大変なんだろう、そんなのは続けられないと思つて、また就職を取りやめた。それでまた就職先を探したけれども、もう紹介のあてがほとんどなくなつたの。時機を逸したのね。

それでも、専修大学の卒業生が社長をしている測定器の会社を紹介してくれた。しかし、ちゃんと試験はありますよつて言われて、早稲田の二人で別の部屋に入って筆記試験をされた。でも授業も行っていないだから、落ちるのわかつてるじゃない。そこも不合

格。

それでどうしようかなつて思っていたら、友だちの山田が運が良かったのか、その当時、東洋電機の子会社で日本オーディオという小さい会社があつて、そこに就職が決まつた。それでウチに來いよと言われ、その資材係に入つたんです。資材係といっても一人しかない。ただの製品の受け渡し。注文が來たら梱包して地方へ送る。そういう仕事だった。その当時は目黒駅までよく行つたな。リアカーに積んでね。

応援団の手伝い

私は専修大学を卒業して社会人になつてからは管弦楽団とは縁が切れたんです。田中先生とは行き来してたけれど、音楽的な付き合いは大学生生活の四年間だけでした。ところが、稲城市でギターマイクを作っている工場で資材課長として働いている時期だったと思います。田中先生のところへ専修大学の応援団の団長をやつた勅使河原という人が遊びに來た。その当時、田中先生はよみうりランド駅の近くに家を建てて住んでいた。

実は私も三年生か四年生の頃に管弦楽団じゃなくて吹奏楽団も別に編成して、メンバーとよく神宮に東都大学野球試合の応援に行っていた。もう何回も応援に行きました。話を戻すと、勅使河原さんは、その頃の応援団は吹奏楽団がなかつたので、応援団に吹奏楽団を創りたいので教えてくださいと田中先生に言つてきたんです。田

中先生は、わかりましたと返事をした。それで、田中先生と私と前に話したアコーディオンの上手な北海道の布団屋の坂井君と、あと二人くらいかな、楽器に詳しい奴を連れて、山梨県の下部温泉で合宿している応援団を指導してやっただけです。一週間でした。

そうしたらなんとか吹奏楽が出来るようになったんです。その後は独自で練習をしたんでしょうけれどね。それから応援団に吹奏楽が付くようになったんです。応援団の吹奏楽部の前身です。

この件については、後日談があつて、また勅使河原さんがやって来て、目黒電機という会社で電電公社の担当を探している。田中先生、誰か良い人いませんかと言っています。それで俺を紹介してもらって目黒電機製造株式会社に入社しました。そこは今で言うNTTの仕事をしてた。NTTは生産工場を持たずに、中小企業をいっぱい抱えて、そこで色んな製品を作ってる。目黒電機製造株式会社はその一社なんです。いくつぐらいだったかな、二〇代かな、三〇代に入ってたかな。とにかく卒業後は、中小企業が多かったが、電機関係の業種は変えず、少しでも内容の良い会社をめざして三〇代で数社会社を変わったが、大学四年間の経験がその後の仕事に大いに役立ちました。

※この記録は、平成二八年一月一八日に草場茂憲氏（昭和三年法学部法律学科卒）に対して、瀬戸口龍一および北口由望（ともに大学史資料課）が草場氏のご自宅にて行った聞き

取り調査をまとめて、草場氏にご確認いただき、掲載したものである。